

演劇学 第25号 抜刷(昭和59・3)
郡司正勝教授古稀記念号

奄美の物語歌

小川学夫

奄美の物語歌

はじめに

奄美の民謡は大きく「アジビ歌」「仕事歌」「行事歌」に分類することが出来る。この中で、今日最も盛んに歌われているのが「アジビ歌」である。文字通り複数の人たちが集まったウタアジビ（歌遊び）の席でうたわれる歌のことだが、伴奏楽器としてサンシン（三味線）が付けられるところから、サンシン歌ということもある。

アジビ歌の一番の特徴は、8886調の、いわゆる琉歌調に代表される短い歌詞が、主に男女の歌掛けによって展開されていくという点である。そのアジビ歌の中に「物語歌」といわれる一群の歌がある。一口に言って伝説や物語を伴った歌（曲）のことである。

「かんつめ節」「うらとみ節」「ちようきく女節」「いそ加那節」「やち坊節」「俊良主節」「長雲節」「梅道長兵衛節」「芦花部一番節」などなど、人名や地名の固有名詞を曲名とした歌は、そのほとんどが物語歌といつてよいだろう。

奄美にあつて、人々が歌にまつわる物語を始める時は、想像以上に真剣なものである。特に悲劇的な話は、つい昨日起こったこと

小川学夫

ように実感をもつて語られ、また聞く側も真実の話として十分も疑うことなく耳傾けるのがふつうである。そしてその歌がうたわれる時には、背景にある話を思い起こしながら、涙しつづ聞くという光景がよく見られるのである。話と歌の相乗効果が、これほど発揮される世界も珍しいであろう。

考えてみると、抒情歌のやりとりである歌掛けの場で、叙事的な物語歌が生まれるというのは一見、不思議な現象といえるかも知れない。しかし実際奄美には、数多くの物語歌が存在し、かつ多くの人々から親しまれている。本稿では、特に「かんつめ節」「うらとみ節」という二つの歌を通して、かかる物語歌が成立する基盤を考えてみたいのである。

「かんつめ節」の場合

奄美で最も人々に知られる「かんつめ」という不幸な娘の話と歌のことから始めることにしよう。

百数十年昔のことという。

かんつめ（所によって、かんでめ、かんとみなど発音される）は

貧しい家に生まれた娘で、当時、ヤンチュ（家人）といわれた農奴的な奉公人として、宇検村名柄のさる豪農のもとに買われていく。たいへんな美人で、また氣立てもよかったので、さっそくその家の主人が目をつけ、自分のネンゴロ（妾）にしようとして、機会を見てはい寄るのである。

しかし、かんづめには名柄と山を一つ隔てた隣り村に、岩太郎という恋人がいた。彼は役所の筆子（書記）で、かんづめとは身分が違っていたが、サンシン（三味線）の上手で、いつか、かんづめと一緒にの席で歌ったのが縁で、相思相愛の仲となったのだった。二人は夜になると、佐念山の小屋に出むき、逢瀬を重ねていた。

初めは二人の仲は誰にも氣付かれなかったが、先ずヤンチュ仲間知られ、やがては主人夫婦の耳にも入ってしまう。

かんづめを思っていた主人も口惜しさが一杯だが、その妻もうすうす夫が、かんづめに思いを寄せていることに氣付いていたので、この話を聞くと、ますます怒りがこみ上げてくるのだった。

そしてかんづめに対する折檻が始まるのだが、こともあろうに妻は、まっかに焼いた火箸で、かんづめの陰部を突き、片輪にしてしまふのである。

かんづめは氣絶から覺め、わが身の受けた仕打ちを改めて知ると、もう岩太郎との恋もかなわぬと覺悟する。そして二人のいつもの違ひびきの場であった小屋に行き、一人首をつつて果てるのである。

夜になって、岩太郎はいつものようにサンシンを持って小屋にやってくる。それから、今やこの世の人でない、かんづめと、しみじ

みウタアシビをやる。やがて別れの時が来てかんづめは

あかす世や暮れて 汝きや夜や明けり
果報節ぬあれば また見逢そ

——私のやって来たあの世はこれから暮れ、あなたの夜は明けて行きます。果報な時節が来たなら、またお逢いしましょう。

と辞世の歌をうたって消えた。岩太郎はふと頭上に目をやると、かんづめの首をくくった姿があるのであった。

その後、かんづめをいじめた家の一族は、はぶ（毒蛇）に咬まれるなど次々と変死し、没落していったという。

異説もあるが、これが世上よく語られる「かんづめ」伝説のあらましである。さてこの物語が「かんづめ節」では、どのように歌われているのであろう。

現在「かんづめ」に関する歌の文句は、あわせて十余首残っているが、その代表的なものをいくつかあげてみたい。（番号、歌詞の順序は便宜的なものである。）

①夕がで遊しだる かんのみ姉くわ

翌日が夜なたと 後生が道に御袖振りゆり

——夕まで一緒に遊んだかんづめ姉さんが翌日の夜には、あの世への道に袖を振って逝くよ。

②かんとみ姉くわや やつとな死にしや

原ぬ空宿りなんて 草ぬ葉し花香しらて

—— かんつめ姉さんは、何と気の毒な死に方をしたことが。野原の中の小屋で、誰に見取られることもなく、そこらにはえてい草の葉を、花香がわりにして。

③ かんとみ姉がいいしよる事や 高頂しがとて
岩加那兄に 送られ欲しやあたんど

—— かんつめ姉さんがいったことは、私は佐念山の頂で一一緒に語らい、岩加那兄さんに送られたかったです。

④ 泣くな嘆くな死じやる人や 仕方ぬありよんにや
線香と墓石や 気張りんしよりよ岩加那兄

—— 死んだ人はもう仕方がありませんからせめて線香を絶やさず、立派な墓石をがんばって建ててあげて下さい。岩加那兄さん。

⑤ 女子ぬ子や 禁るなよ親兄弟きや
名柄かんとみ姉 死様し様見ちやみ聞ちやみ

—— 女の子はあまり厳しくいじめなさんなよ、親兄弟よ。名柄のかんつめの、あの死様やしたことを見ましたか。聞きましたか。あんなことになってしまいますよ。

⑥ 生りらばよ加那 かんとみ姉くわや生りするな
真塩ばちでなぶて 水ば飲でこの世立ちゆる

—— 生まれるのなら愛し子よ。かんつめ姉さんのような生れはするな。食べるものも食べられず、塩をつまんでなめ、水を飲むだけで、この世を立って行ったというではないか。

この六首からも分かるように、これらが事件のあらましを、順序正しく、いわゆる叙事歌風に向うたっているのではないという事は明らかである。全体、たしかに、かんつめの死をうたってはいるが、あの世に旅立っていったかんつめの哀れさ、無情さを、感慨を込めて抒情的に歌ったものである。

⑤⑥などは、もう事件をうたったというより、この悲劇に対する感想であり、後の人に対する教訓の歌となっている。
とすれば、「かんつめ節」にうたわれる、これら一連の歌詞は、少くとも文芸用語上、正しい意味での叙事歌とかバラード(謡)とはいえないということである。むしろ、事件や人物に対する感慨や感想をうたいあげたという意味で、叙事歌だというのが正しい見方だと思ふ。

ここで改めて「かんつめ節」も、歌掛け形式でうたわれるということに注目しなければならぬ。私は初めに「抒情歌のやりとりである歌掛けの場で、叙事的な物語歌が生まれるというのは一見不思議な現象……」と書いた。しかし「かんつめ節」が、かんつめ悲話に対する人々の思いを歌いあうところに成立したのだとすれば、この事情が明確に理解できるのである。

ところで今一つ、ひじょうに興味深い問題がある。この歌は、当時、宇検の奥宮喜喜という人が、かんつめが生前、最も得意として

いた「はんめ取り節」に、その悲劇を歌ったのが始まりだとする説があるのである。

「はんめ取り節」は

何処かちがいもゆる 色白る女童

はんめぬ足らだな はんめ取りが

はんめやわが取て持たさば、わっ二人だんだん昼山焼こや

——何処に行くのか色の白い娘さん。はんめ(芋などの食料)が足らないので、はんめを取りに参ります。はんめは私が取つてあげるから、私たち二人、ここで昼山を焼きましょう。※昼山焼きというのは文字通り野焼きの意味と、性の交わりをも意味している。

といった文句が歌われる。今は純然たるアジビ歌の一つとして、鳥の一部に伝えられているが、もとは野焼きのため草木をなぐ時の仕事歌だったといわれる。その、のどかな曲調や歌詞の内容からいっても、およそ「かんつめ」の話とは似合わない。しかし曲節の類似や歌唱形式の比較から、「はんめ取り節」が「かんつめ節」の原曲であることは間違いないことである。

このことは、奄美の物語歌の性格を考える時に、一つのポイントともなるべきものだと思はれる。

先ず、歌の文句と曲節とは同時に生まれたものではないということ。つまり既成の曲があって、それにある事件や人物なりをうたううちに、それが一人歩きを始めて、やがて一つの立派な物語歌に成

長するという事実である。

実はこうしたケースは「かんつめ節」に限ったことではない。

例えば「塩道長浜節」という喜界島の塩道の浜で起こった、とても悲しい事件をうたった歌がある。曲の印象もひじょうに悲しい。

塩道長浜に 童泣きしゆすや

うりや誰がゆい けさまつ汗肌ゆい

——塩道長浜に男の子が夜な夜な泣く声がある。それは誰のためか。けさまつという女の魅力のためだ。

この文句に出てくる童は、けさまつという女に惚れ、彼女にしくこくしい寄った青年である。けさまつは神女であったともいわれ、男に肌を許す気など全くなかった。しかし男が余りにも執拗なので、塩道の浜で逢うことだけは承諾する。その時、けさまつは馬を連れてくる。そして男に、「馬が逃げるといけないので、手綱をあなたの足にゆわえておいて下さい」というのだった。ゆわえ終えると、けさまつは、手にしていた日傘を、馬の目の前でパッと開いた。馬は驚いて浜を駆け巡り、男は引きづられるままに、その浜で死んでしまうという話である。

この曲も、そのもとを探っていくと、舟漕ぎ歌にたどりつく。証拠はいくつかあげられるが、徳之島で採集された「沖の夜走らし」という歌に、今あげた歌詞の下句部が、ひょっこりうたわれていたことからも分かるのである。

ついで「俊良主節」は、名瀬の名家、基家の俊良氏が、新婚間も

ない頃、愛妾を海で失ったのを、泣く泣く嘆くなど感める歌だが、この原曲も、草なぎ歌だったとされる。

また「ちようきく女節」は、加計呂麻島であった、ちようきくと、かつくにとの無理心中の事件をうたったものだが、これもそのもとの歌は物語りとは何のかかわりもない歌であった。今日同系統の歌が「昔くるだんど」とか「早くくるだんど」ともいわれて残っているが、曲名が示すようにテンポ速くうたわれるもので、どうみても悲劇をうたう歌とは、およそ似つかわしく感じられないのである。

このように奄美の物語歌は、そのほとんど何らかの先行歌を持つ。そしてそれが原質に近い民謡であるということは、きわめて重要な点だといえよう。

今日、奄美のアシビ歌が哀調を帯びた歌だとは多くの人がいうことである。本来、おおらかだった奄美の歌が、このように悲しい歌になった理由はどこにあるのだろうか。それこそ「かんつめ節」や「塩道長浜節」や、「ちようきく女節」などにみられる「物語性」ではなかったのか。たんとんと短い文句を掛け合う本来的な民謡に「物語」をとり込むことにより、感情移入(思い入れ)というあらたな叙情の方法を獲得したということなのである。

以上、奄美における物語歌の成立事情と、それに伴う奄美の歌の変質の一端にもふれてみたのであるが、もう一つ、ちがったケースもみておきたい。

「うらとみ節」の場合

うらとみ、むちゃ加那という母娘の悲劇を主題とした歌で「かん

つめ節」に劣らず人気ある歌の一つである。ここでも、その物語から記そう。

うらとみは加計呂麻島の生(なま)まれで、全島に聞こえる美人であった。薩藩から島に派遣されていた代官が、この娘の評判を聞きアソコ(姉御)代官や役人たちの島妻)になるよう求めた。しかし、うらとみはもともと貞操観念の強い女だったので、即座にそれを断った。面子を失った代官や、間に立った役人たちは、それはよしとして、高い税金を課するなど、生間の部落全体に色々な圧力をかけてきた。ついに、うらとみの親や兄弟たちがいたたまれなくなり、うらとみを通夜舟に乗せ、行くあてとて分らない沖へ押しやるのであった。

いく日か、うらとみの舟は海上をさまよい、着いたところが、喜界島の小野津の浜であった。ここでうらとみは村人たちに助け出されやがて島の、ある男の後添えになる。そしてむちゃ加那という女の子をもうける。彼女も母親のように美しい娘に成長していった。

ある日のこと、むちゃ加那は村の娘たちに誘われて、オオサ(奇海苔)を採りに海に行く。娘たちは、けっしてむちゃ加那が好きだったのではなく、彼女がとてもきれいなので嫉妬していた。この日、とうとう岩場でオオサ採りに夢中のむちゃ加那を、海へ突き落してしまふのである。

さて、なかなか家に戻って来ないのを心配したうらとみは、海へかけつける。そして、むちゃ加那が海へ落ちて流されたことを知り、彼女も海へとび込み、娘の行方を追うのだった。

二人は生きて戻らなかった。むちゃ加那の死体は小野津の浜に上

がり、うらとみの方は大島本島の青久（現住用村内）に上がって、今もそれぞれの墓が祀られている。

アシビ歌「うらとみ節」として歌われる歌詞は、

①喜界きがいや小野津おのつぬ 十柱とじゅうむちや加那

おおさ海苔かい刺さきが 行ゆもろやむちや加那

——喜界は小野津、十柱（字名）のむちや加那よ。おおさ海苔を採りに行こうよ。むちや加那。

②美みらさ生まれれば 友人ともに憎にくまれて

きもちやげむちや加那や 潮波しほなみに引きやされて

——美しく生まれたために友人に憎まれ、かわいそうなむちや加那は、海の潮波に引かれて、なくなってしまうよ。

③うらとみやうらとみ 戻かへらめやうらとみ うらとみ戻かへしゅ人ひとや
しまぬ狂者くるましや

——うらとみよ、うらとみ、戻らないか、うらとみよ。いや、うらとみを戻そうとする者など、わがしま（部落）の馬鹿者だぞ。

が主なものである。

①は、しまの娘たちが、むちや加那を海へ誘うところ。②は、哀れなむちや加那の死を嘆いたもの。③の歌詞については二説あり、その一つは、小野津に流れ着いたうらとみに対し、彼女が長くいる

と、自分たちのしまにも良くないことが起こりそうなので、誰かがうらとみを再び、加計呂麻の生間に戻そうというところ、長老の一人が「いや、こんな貞節なうらとみを、戻そうとする者こそ、馬鹿者だ」と、いましめたというものである。もう一つの説は、娘を追って海に消えたうらとみを、今さら生き返らせようとするのは、しまの馬鹿者だといったものだが、今、そのどちらが正しいという確証はない。

さて、ここで一つの問題は、この「うらとみ・むちや加那」伝説の成り立ちなのである。

異説があるという点では、先の「かんつめ」伝説も例外ではなく何ら驚くにあたらない。しかし、この話では、先ず主人公の名前から「ましゅ加那」と全然別の名がいわれている所があること、さらに、この話は母娘二代の話ではなく生間から小野津に流れ着いたのも、美しさが嫉妬されて、村の娘たちに海へ落されてしまうのも、むちや加那だったという極端な話まで、現実には伝承されているのである。誠にもって不思議なことといわなければならない。

ここで私は、「うらとみ節」とおそらく深いつながりを持つであろう長時形叙事歌「とばやむちや加那」の存在を考えれば、その謎が、解けることに気が付いた。

この叙事歌は、今は詞章だけが、いく人かの研究者によって採集され残っている。残念ながら、どんな節廻しで、またどんな場所やどんな時にうたわれたのかということが、ほとんど不明なのだが、ウタアシビの場で、例えば徳之島で盛んな「口説」のように、一人のウタシヤ（歌い手）が、初めから終わりまで順々とうたって聞か

せたのではないかということ想像できる。が、一般的なアソビ歌のように歌掛けによつてうたわれることは先ずなかつたであらう。

長詩は歌掛けには全くなじまないからである。
ともあれここに、一つの採集例をあげてみる。⁽⁸⁾

青鳩親鳩に訊ねたと

潮尻に曳かさったんち言ちやむ

(後略)

喜界や小野津ぬ十柱むちや加那
青さ吉はぎやに参ろむちや加那
青さ吉はぎ行き欲しや有しが
阿母に知りてから行かんばん居らばん
あんまにしらりて見りば

阿母や行けち言り 父や居りち言り
祖母や欲どれや棧棹たりりち言り
棧棹たりりば布綾ひらいち言り

布綾ひらえば 縦貫績めち言り
縦貫うめばや 水汲で置きち言り

水汲で置きばや 行きばむ居らばむ
行きや行きじやししが 側入り横入りすな

側入り横入りしりば 童ぬ見ち語ゆんど
童ぬ物言ん者な苦辛うち喰ろしゅんど

十柱むちや加那見りやんたみ親鳩
谷々浦々なんにや赤牛黒牛ぬ居すが

うりん訊ねてん見ち言ちやむ
赤牛黒牛に訊ねたと 青鳩親鳩ぬ居すが

うりん訊ねてん見ち言ちやむ

むちや加那が友だちにオオサを採りに行こうと誘われる。母は行つてもいいというが父は家にいるという。欲深かの祖母が、いろんな用事をいいつけるが、むちや加那は、それをすませて海に行く。さて、むちや加那は時間がたつても戻らない。母は谷々浦々尋ね歩き、赤牛黒牛に「むちや加那はどこ」とたずねると、青鳩親鳩がいるから、彼らに尋ねなさいという。青鳩親鳩に尋ねてみると、哀れむちや加那は、潮尻に曳かれて海に消えたと教えてくれた——というのがこの歌の筋である。これはメルヘン風の、もう立派な叙事歌であることが分かるであらう。

そして、冒頭の「喜界や小野津の」の部分は、そっくりアソビ歌「うらとみ節」でもよくうたわれることに気付く。この一点からみても、「とばやむちや加那」が「うらとみ節」と関連あることは疑う余地がない。

ところが、この長詞形叙事歌「とばやむちや加那」には、むちや加那が悪友によつて海に突き落されたとも、また、うらとみという母親のことも全く出てこない。これはどうしてであらう。

それに対する答はただ一つである。このメルヘン風な歌が先ずあつて、これに後世、色々な話が附加して、次々にふくれ上がつていったのだということである。

海で死ぬ娘は昔から数え切れないくらいいたはずである。たまた

ま加計呂麻や、大島本島から吾界に嫁いだ女性がいて、その子が海でなくなつたという事件もあったかも知れない。そんな話が、ことごとく「とばやむちゃ加那」の歌に結び付いて語られるようになった。こう考えれば、先にあげた極端な異説が多々存在するわけもよく理解できよう。

最初の「かんつめ節」の場合、その先行歌は、民謡の原点ともいふべき仕事歌であった。それに対し「うらとみ節」の場合は今見たように長詩形叙事歌が先行歌である。

ここで奄美の物語歌が、実は島で、主にユタ(巫者)たちが神歌としてうたう長詩形叙事歌の系統を直接引いているという考え方が、あることも紹介しなければならぬ。

それは「おもろ」研究をはじめ南島歌謡研究にすぐれた実績を誇る小野重朗氏の説である。氏はその著「南島歌謡」の中で次のようにはっきりと述べている。

「奄美に多くみられる人物を主題とした『野茶坊節』『かかく鍋加那節』『かんつめ節』などの短編の抒情歌謡群(いわゆる物語歌)のことで、小野氏はほかで叙事の半叙事歌ともいっている(筆者註)は、古い英雄叙事歌につながる人物賛歌としての叙事歌から分化して成立したもので、物語りと抒情歌とが共存しているものである」と。

この考え方は、小野氏がかねてから構想する南島歌謡変遷史とも無縁ではない。つまり氏は、南島における短詩形叙事歌は、長詩形叙事歌の時代を経た後に、その叙事歌を母体として発生したものだという見方をする。まさに「とばやむちゃ加那」と「うらとみ節」

とは氏のこの考え方を証明する格好の資料といつてよいだろう。しかし今の私の考えは「うらとみ」は南島歌謡史、ひいては奄美の物語歌の成立を考えるには特殊な例だということである。

私は第一に、小野氏のように奄美を含む南島の歌謡が、長詩形叙事歌から短詩形叙事歌に移行したという説は認めがたい。あくまでも、短かい叙情的な文句をやりとりする歌掛けの世界は叙事歌の時代と平行して、はるか昔から連続していたと考えるからである。

だから物語歌の場合も、長詩形叙事歌を原歌とした「うらとみ」型よりも歌掛けの場で生まれた「かんつめ」型物語歌の方が、奄美では普遍的な形だと、私は理解しているのである。

註(1) 昇曙夢著『奄美史』 文潮光著『奄美民謡大観』など。

(2) 『日本庶民生活史料集成』19 「南島古謡」 奄美諸島三味

歌(久保けんお) 91ページより。当字、共通語訳など、一部変えた。

(3) 前掲『奄美史』

(4) 前掲『奄美民謡大観』

(5) 久保けんお著『南日本民謡曲集』

(6) (1)に同じ。93ページ。

(7) 筆者、宇検村湯湾にて採集。

(8) (2)に同じ。

(9) 第四章ウター抒情歌の歩み― 3. ウタと物語り 240ページ。

